

秋季大会発表要旨

特集

〈流通する書物〉の近代

—変動期におけるネットワーク形成と文化

運営委員会

【特集の趣旨】

書物は、読まれることで意味を生成するだけでなく、それが物質として流通することによってもまた意味を生み出す。本企画は、近代日本の変動期においてまとまった量の書物の移動が行なわれることによって引き起こされた、様々な文化のダイナミクスに着目し、出版流通の問題を文化・文学史との接続のなかで考える試みである。

近世から近代へと移りゆくなか、活版印刷や郵便・鉄道網等のインフラの整備が進み、書物は徐々に全国に普及する。これと並行す

る書物の動きに目を向ければ、変動期に現れた個性的な書籍業の存在に気づく。たとえば明治一〇年前後、目録注文による新たな貸本業態が登場するが、これらの業者の一部は地方への郵送貸出も取り入れていた。また関東大震災後には、壊滅的な被害を受けた東京へと古書が大量に流入することによって、明治文化の再評価へと繋がった。

さらに「外地」では日本からの移民によっても書物の流通網が開拓された。帝国拡張期には教科書という書物により日本国家の価値観に基づいた教育が強制される一方、円本のゾッキ本が「外地」で多量に流通し、新たな読者層が誕生する契機も生み出された。アジア・太平洋戦争に至ると、「外地」への取次や書店の進出によって「帝国」を股にかける

書物の商業圏が確立されていく。それらによって引き起こされた文化や文学観、民族観の折衝をいま一度問い直す必要はないか。

戦後、焼け跡となった東京の出版界が停滞するなか、地方の出版は独自の再出版を遂げた。福岡周辺では、戦時下の地方文化運動で培われた土台を一部に継承しつつ、郷土性を重視した雑誌から、著名作家の原稿を集め中央文壇に伍そうとする雑誌まで、多様性に富む出版活動がGHQ検閲下に展開された。この時期の地方から中央への書物の流通が果たした文化的役割も検討できるだろう。

近年の出版取次大手の相次ぐ破綻に象徴されるように、書物の流通制度は、現在厳しい局面にさらされている。書店だけではなく、インターネットで書物を購入する文化が根付いて久しい。さらに書物自体も印刷物から電子データへと姿を変えつつあり、流通の劇的な変化は、これからの文化のありようにも多大な影響をもたらすと思われる。

以上のような通史的・横断的な検討によって、書物の流通が引き起こしてきたネットワーク形成と、それにより生じた文化および文学的想像力の変容の諸相を明らかにしたい。

異本流通の磁場

——『徳川十五代記』『明治太平記』を
例に——

磯部 敦

明治二十年前後、東京と大阪とでおびただしく刊行された書物に『徳川十五代記』『明治太平記』がある。新聞広告に端を発する安売り合戦が、同題本を市場にあふれさせることになったのだ。それは、版權／無版權という制度の問題でもあり(木戸雄二「版權免許」という惹句——明治十九年『大阪朝日新聞』の出版広告——)、無版權本におけるテクスト編集の問題でもあった(拙稿「歴史を「編輯」する——群生する『近世太平記』『明治太平記』の内と外——)。本発表では、これを流通という側面から捉えなおしてみたい。書物が市場に流通することで、また自店の棚が回転することで利益を得ることができるようだから、流通は出版営為の根幹と言ってよい。けれどもひとくちに流通といっても、書物(ハード)それじたいが流通するばあいと、

中身(ソフト)が流通するばあいとの二側面があるように思う。同版と異版の流通、と言いつてもよい。『徳川十五代記』や『明治太平記』を流通という側面から検証するならば、この両面からアプローチする必要がある。同内容の書物が同時期に大量に出まわるのは同一ハードの流通だけでは説明しきれないし、実際に版面を調べてみると、それらのほとんどが異本なのである。では、異本群の出現は、どのような流通事情を示しているだろうか。この問題は、ひとつには異本発生を支える書物生産技術、具体的には紙型印刷と通底しているだろう。そしてもうひとつは、異本をとりまく書肆どうしの関係とも関わってくるだろう。この二側面から検討してみたとき、興味深い存在として浮上してくるのが大阪の偉業館(岡本仙助)なのである。本発表は、上記の視座から『徳川十五代記』『明治十五代記』の出版営為を検討するものである。またあわせて、近代出版史、とりわけ近代初期の出版営為を流通という側面から検討しうる史料の有効性と限界を検討してみたいと思う。

ネットワーク・空間・ヘゲモニー
——内地／外地を結ぶ書物流通

日比嘉 高

現在、内地と外地を結んだ書物の流通網の調査研究を進めているが、悩むのは書物流通という社会的装置についての分析を、文学研究など文化コンテンツについての論とどうつなぐか、ということである。書物流通の社会的な仕組みがあり、その「上」に文化が乗っているというイメージは、漠然と共有されているように思う。だが、ではその「上」に乗っている」という状態は、どのように——この比喩が適切であるかどうかも含めて——研究の言葉で説明できるのだろうか。

まずは内地／外地を結ぶ書物流通のネットワークを、できるだけ実証的に捉える必要がある。取次、書店、同業者組合などの歴史を追いかける。さらに、これらの書物を直接的に担った諸要素の背後に、交通網があり、教育制度があり、図書館があり、国家ならびに植民地機関の統制がある。

こうした社会的装置と連関しあつて文化的な活動が営まれる。文学はその一部であるが、考えたいのは文学の問題だけではない。内地／外地を結んだ書物の流通ネットワークは、いかにして文化を生み出し、形作つたのかを考えた。課題の一つは、書物流通が植民地支配下において「空間の(再)生産」(アンリ・ルフェーブル)を行い、その空間およびネットワークの配置が帝国のヘゲモニーの維持・行使に関わつたことの考察である。この問題は、支配的ネットワークの形成・運用と抵抗のネットワークとの関係を考えるという課題にもつながる。また流通する商品である「書物」というものの考察も必須であろう。書物はモノであり、同時に知であるのだから。そしてネットワークに関わる主体(間)の行動も考えねばならない。帝国の書店網は多民族の接触空間を創り出す。

最後に、余裕があれば書物の流通網と文学空間の関係を考えよう。インフラとしての機能はもちろんだが、外地書店は、場合によってはサロンとして、出版元・販売元として、またアジュールとしても機能していた。

戦後の地方出版社の問題

坂 口 博

一九四五年敗戦直後から四九年まで、九州の出版は、活発な活動を見せた。ことに福岡市をはじめ、文学関係のみならず、雑誌・書籍ともに大きな実績を残している。「九州文学」「午前」「文化展望」など、その一部は復刻されることによつて知られているが、ほかにも「九州評論」「叢智」「蒼房」「文化ウイクリー」などがあつた。文学書の出版では、九州書房・南風書房・九州評論社・新興芸術社・人民科学社・金文堂出版部など。いずれも新たに九州で興された出版社である。

これらには、火野葦平・矢野朗(「九州文学」九州書房)、真鍋呉夫・北川晃二(「午前」南風書房)、大西巨人(「文化展望」)、井上光晴(九州評論社・人民科学社)、小島直記(「蒼房」といった小説家が深く関わつた。出版活動と創作活動が一体となつて注目に値する。また、彼らは「文壇」との関わりがなかに、後に、東京との縁を深くしていった。東

京周辺に居住地を定めた作家も多い。なお、九州評論社を前身とする五月書房のように、出版社自体が、流通の便宜もあつて東京へ移動していく例もある。

こうした活動を具体的にみていくことで、浮かびあがつてくる問題を考えてみたい。一九四九年までの他地域の出版活動との差異、その後の福岡県周辺の文芸同人誌やサークル誌活動との比較、九州・山口在住のまま創作活動を続けた作家たちとの相違、一九七〇年前後からの福岡市における專業出版社の活性化、そこには「文壇」やメディア・情報流通手段の変容にとどまらない、文学・文化の根源的な段差も視野に入れて考察していく必要が出てくるだろう。

近現代における購書空間の意味と 変容

柴野京子

メディア研究の立場から、出版流通を対象とすることはいくつかの困難がある。周知の通り、日本の出版産業は、取次―書店という特異な流通システムを長年にわたって維持してきた。これは雑誌を中心に形成された日本の近代出版が、産業の安定をはかるため、大正期に固めた定価販売と同業組合を原型とし、戦時出版配給の一元化によって完成する。すなわち、日本の出版産業そのものが流通を軸に組み立てられているといえるのだが、このことが出版流通を業界構造と不可分にし、あらゆる論点を内部の言説にととどめ置くことにもなった。

加えれば、それが外部に可視化されるのも、産業的な均衡を失したときであるため、現象だけが批判、嘆き節、陰謀論などへと還元されて、出版流通の本質的な意味は置き去りにされた。この傾向は、デジタル、ネットワー

ク技術によって出版の概念が揺らぎ、すさまじい再編成を余儀なくされている今日においてすら、変わりがないように思われる。

今回の報告では、以上のような問題意識から「出版流通を問う」ことの立場を明らかにしたうえで、近現代の購書空間を概観したい。

近代出版は、さまざまな集積・排除を経て、「書籍雑誌を売る新刊書店」という意味での「書店」を構築した。これらは戦後において、経営方針や規模に応じたいくつかの区分けがなされてきたものの、基本的には相似形の品揃えを均等に提供し、金太郎飴書店とも揶揄された。だがいっぽうでこのような実態は、

メディアとしての「書店」がある種の複製技術として供され、利用されてきたことの必然であったともいえる。それは、アマゾンのようなインターネット書店の出現によって巨大化し、データベース化した「書店」の姿と、これに呼応するように現れた小型のセレクトショップを対置することで、より明確になる。

文学研究における出版流通への関心は、広義の読書・読者研究、および生産システムにおかれると考えているが、その中でメディア論的な観点からの流通論がどのように接続

し、可能性をもちうるのか、議論の機会を得たいと思う。

秋季大会研究発表

第一会場（A201教室）

個人発表

近代官製国文学「幻の系譜」考

——久松潜一と新国学の四大人——

木下 宏 一

昭和一六（一九四一）年初冬、東京帝国大学文学部の国文学研究室主任教授として当時名実ともに日本の国文学界を牽引する存在であった久松潜一（二八九四—一九七六）は「日本学問の伝統と国学」（『文芸世紀』一二月号）と題した論文において「国文学の国学への志向」という従来の主張を改めて展開した上で、次のように述べた。「今日の国学に於て先づ求められるのは日本の学問の伝統を顧み、日本的学問の系譜を跡づけることである」。「芳

賀（矢一）博士の学問の伝統は今日に至るまで貫いて居るのであるが、垣内松三氏の学問精神や三井甲之氏、沼波瓊音氏の学問精神の中にもかういふ伝統はうけつがれて居」る。すなわち「この伝統の上にこそ真に自主的な日本学問が確立されるであ」らう、と。

ここに挙げられた四人（仮に「新国学の四大人」と称す）のうち芳賀と垣内については久松が学生時代に直接指導を受けた恩師であり、国文学者としての声望からいっても当然である。だが沼波と三井については、前者は専門の俳諧研究以上に晩年の狂熱的な国家革新運動によって知られた人物であり、後者に至っては日本主義の歌人・思想家として長年右派論壇の一翼を担い、リアルタイムで帝大肅正運動（欧米的学風批判、大学自治の否定）を果敢に実践していた人物なのである。かかる両名が、一論文中とはいえ国文学アカデミズムの最高権威の手で、全ての国文学研究者が範とすべき正統な学問の系譜に公然と位置付けられた「事実」は、決して看過される

べきではない。

本発表は、問題の系譜を、対米開戦は早晩不可避と受け止められていた当時の日本社会に在って緊張・高揚する意識のなかからおのずと流露した久松の偽りなき本心にして彼自身の学問的・思想的系譜そのものであったと仮定し、「新国学の四大人」就中沼波瓊音と三井甲之の学問と思想が、久松のそれにじっさいどのようなかたちで影響を及ぼしていたのかについて考察する。

詩人・宗左近の転換点

——『炎える母』の成立をめぐる——

稲田 大 貴

北九州・戸畑に生まれた宗左近は進学のため上京し、東京帝国大学文学部哲学科在学中の一九四五年五月二五日、空襲に遭い、目の前で母を喪った。それから二二年後の六七年六月、その体験を基に書いた第三詩集『炎える母』を上梓した。本作は第六回藤村記念歴程賞を受賞した宗の代表作である。

炎に焼かれる街の中で、自身も命の危険に晒されながら、目の前で母が燃えるのを見てしまった体験が、容易く言語化できるものではないことは想像に難くない。二二年という歳月の中で宗において何が、どのように作用し、『炎える母』が成ったのか。本発表はその詩性の変容、変遷について明らかにするものである。

宗は四五年六月一日付の「日録」において、「私は母に、私の作るお埒、詩を捧げねばならない。」と書いており、それから数日、詩作を試みた様子が窺える。その後、ノート中に「炎える母」という語は現れるものの、詩は見当たらない。「炎える母」に関する詩が資料に現れるのはノート『炎える母 1964.9.28』からである。しかしこのノートに書かれる詩は頼りない筆致の未完成のものばかりであり、詩作に関する強い戸惑いが窺われる。そして、決定稿に近い詩作が現れるのはノート『炎える母一九六四』である。このノートは表題に「一九六四」とあるが、内容は宗がフランス留学していた時期のものであり、実際に使われたのは一九六五年末頃かと推測される。宗は『炎える母』執筆の契

機として、フランス留学中、カフェから街路樹を見ていた時にマロニエの実が落ちるのを見たこと、と多くの著作で述べている。

本発表では、先に挙げた関係資料（北九州市立文学館所蔵）と宗の発言を精査しつつ、年長の友人であり同じ「歷程」同人であった草野心平との交友、宮沢賢治詩との「出会い」を視野に入れ、『炎える母』成立に関わる宗の詩性のあり方について報告する。

中上健次「蛇淫」論

——「事実の肯定」をめぐる

旦部辰徳

中上健次は最も近い他者へ向けられる、最も重く受け止められてきた暴力である（親殺し）を物語にいかにかに定位しうるかを、「岬」（一九七五年一〇月）執筆前後の一時期において集中的に模索していた。本発表では、当時の（親殺し）をめぐる中上のエッセイ群と、同一主題を持つ短編『蛇淫』（一九七五年九月）との関係を考察する。

まず、エッセイ「地図の彼方へ」（一九七五年八―十一月）で、当時新聞で報道された青年による（親殺し）の事件が、同じ（親殺し）の主題を持つ上田秋成の「焚燬」の主人公大蔵の凶行と比され、（親殺し）という「事実」に対する両者の態度の差異が抉り出されていることを示す。後者には、肉親の殺害という凄惨な「事実」を、「心理のまっさつ」によって反省の契機を排し、善悪の彼岸で「肯定」する「無頼」な主体性が顕在化しており、前者はかような「無頼」の「とぼ口」に立ちながらも自らの罪に対峙する際「激しく不安な」脆さを垣間見せる存在として定位される。中上は、「焚燬」的な「事実の肯定」を超倫理的な世界認識の処方として称揚する一方、アモラルの極致には至れない青年への共感を仄めかし、自らをそこに投影している。

続いて、中上がこのアンビバレンツに垣谷雄高から引いた「同律律の不快」の問題——「わたしはわたしである」という自意識への問い——を接ぎ木し、「私は私でしかありえない」主体として「焚燬」を、「アイデンティティの不確かな」主体として青年を弁別していることから、そこに（自己的可変性）とい

う尺度が設けられていたことを指摘する。

「蛇淫」において、〈親殺し〉の当事者としての主人公がその「事実」を処する機微に、如上の「事実の肯定」に対する評価の揺れが立ち現われるも、最終的に「事実」に翻弄され激しく動揺する主体のありようを描くことが選択されていく経過を確認したうえで、その企図を同時期の他の短編も参照しつつ探りたい。

パネル発表

優位化する小説

——明治二十年代のメディアと言説

大橋 崇行・富塚 昌輝

木村 洋

(ディスカッション) 出口 智之

日本近代文学研究は、小説や詩の実作者をとりあげて、そこでどのような営みがなされ、その結果どのようにして文学テクストが創り出されてきたのかという問題を扱ってきた。あるいは、テクストの読解や分析そのものを、研究の目的としてきた。それらをひとつの歴史として語ってきたのが文学史であり、したがってこのときの文学とは、ほとんどそのまま小説や詩、そのなかでも特に、後に「純文学」と位置づけられる小説群を指していたのである。

しかし改めて指摘するまでもなく、日本の近代文学成立期とされる明治のはじめにおいて、文学という用語はそもそも人文科学全体

を指す、より広い概念を持つ用語だった。また、江戸期における文学といえばまずは漢学であり、後の小説につながる戯作は必ずしも中心的な位置を占めていなかった。江戸という街において編成された物語を語るメディアという視点でも、歌舞伎や浄瑠璃、講談をはじめとした演芸のほうが、小説よりも中心的な位置を占めていたといえる。そして明治期は、あくまでその延長線上に位置していたはずである。

このように考えると、明治二十年代の文学をめぐる言説は、いわば、小説が他の人文科学領域や文化領域に対して優位性、権力を獲得していく過程そのものだったといえる。たとえば坪内逍遙『小説神髓』は、あくまでその契機のひとつだった。また、後の文学研究はいわば、そのときに編成された枠組みのなかで行われてきた。その意味で、日本近代文学を研究するにあたって小説をその対象に据えることは、けっして自明なことではない。

それでは、このときに作り出された小説の権力とは、いったいどのようなものだったのか。そこにはどのような力学がはたらいており、小説はどのようにして優位性を獲得した

のか。本パネルはこのような問題を、明治二十年代の言説を対象として考えることを目的とする。

まず、大橋崇行が扱うのは、山田美妙の小説『蝴蝶』（明治二十二年）をめぐって『国民之友』や『読売新聞』で展開された、いわゆる「裸蝴蝶論争」である。この問題は竹盛天雄や中島国彦、山田俊治などをはじめさまざまなに論じられてきたが、本発表ではこれらの先行研究に対して、特に同時代の哲学、美学、芸術学、批評と小説テクストとの関係や、『国民之友』というメディア内部において作り出された文章ジャンル間の権力構造という視点から分析をおこなう。このことで、『蝴蝶』という小説が明治二十年代はじめにセンセーションを巻き起こしたことが、草創期のマスメディアにおいてどのような意味を持っていたのかという問題を再考する。

富塚昌輝は、石橋忍月と森鷗外の「舞姫」論争において「履歴」の問題が焦点化されていたことを入口として、明治二十年前後の小説における「履歴」と作中人物との関係について考察する。例えば坪内逍遙『当世書生気質』（明治十八〜十九年）には小町田繁爾の「履

歴」が長々と記されていたし、二葉亭四迷『浮雲』（明治二十〜二十二年）には「チヨツピリ孫兵衛の長女お勢の小伝を伺ひませう」とあった。こうして、あらかじめ「容貌風采と彼の履歴を演説」（須藤光暉『雛黄鸝』明治二十一年）する体の人物描写が確立するかに見えた矢先、忍月と鷗外の論争が勃発する。小説が人物把握の仕方を再考しはじめたこと、これがどのような出来事なのか考える。

木村洋は、森田思軒による「社会の罪」の提唱（明治二十四年）とユゴー熱の鼓吹が小説家たちに新たな模索を促していく動きを分析する。明治二十年代を特徴づけるのは、小説家と硬派言論人、卑近な言葉と知的な言葉の友好関係である。「社会の罪」という主張は、そうした友好関係を強化するための仕掛けとして機能しており、おそらく樋口一葉の「たけくらべ」（明治二十八〜二十九年）、「こりえ」（明治二十八年）などの作品とも無関係ではなかった。小説というジャンルは、このように硬派言論人たちの言説と親交を結ぶことで変貌を遂げ、言論空間の中で発言権（権力）を増していったと見られる。

以上三名の発表を踏まえた上で、デイス

カッサントの出口智之を司会とし、発表者と会場とのあいだで討議を行う。このことを通じて、日本近代文学研究、あるいは、これらの人文科学領域において明治期や近代についての研究を進めていく上ではどのような方向性が有効なのか、その可能性を探っていきたい。

第二会場 (A203教室)

個人発表

安部公房の初期テクストにおける

「砂」の表象

——植民地経験をめぐって

解 放

安部公房は出発時からその前衛的作品によつて現実世界とは異なる空間を模索し続けてきた。とくに初期作品において安部は「砂」にその異空間構築の意図を託している。従来の研究では、安部の作品における「砂」もたらず機能や、「砂」の流動性と戦後社会情勢との照応などが焦点化され、芸術作品における「砂」に暴力的メタファーの象徴性が付与されるとともに、疎外や排除といった「男性的」特徴が結論付けられてきた。

しかし、安部の作品に描かれた「砂」の表象からは、こうした比喩が必ずしも読み取れるわけではない。この発表では特に安部の初

期テクストに描かれた「砂」のイメージに含まれるエロス性に着目する。また、このエロス性の起源が、安部が植民地・満洲で過ごした幼少期の実体験にあることを明確化したい。

安部の初期テクストにおける「砂」の表象とエロス性の系譜は、四〇年代の作品『終りし道の標べに』を出発点とし、五〇年代の作品群を通して「砂」の表象の女性的イメージが成熟し、特に『S・カルマ氏の犯罪』に描かれた「砂」の表象からは「女性」のイメージが具体的な次元で読み取れる。更に、一九六一年の『砂の女』において、「砂」のエロス性は、テクストに描かれた砂穴の外観とその性質から連想させる「子宮」のイメージで表象されることでその極限に至る。一方、安部は一九五八年のエッセイ『砂漠の思想』で、自分が意識した「砂」は満洲国に由来すると断言している。従つて、初期テクストにおける「砂」のエロス性は安部の植民地経験と深く関わる事が窺える。

本発表では、上述した安部の初期テクスト群に詳細な分析を行うことにより、そこに見られる「砂」の表象のエロス性を抽出し、安部の初期テクストにおける「砂」が「女性的」

様態を呈する原因と安部独特な植民地体験との関連性を究明したい。

「周辺飛行」にみる安部公房の「方

法論」

——「迷路」の構築

河 田 綾

一九七一年三月から一九七五年六月にかけて、新潮社刊行のPR誌「波」に掲載された安部公房の連載「周辺飛行」(全四四回)は、連載第一回の「編集だより」が「いわば氏(安部)引用者注」の創作ノートであり、また実験室である」と伝えているように、創作の舞台裏を読者に紹介することを目的としていた。掲載された文章は、小説や戯曲のみならず、演劇論や言語論を展開する随筆など多岐にわたり、同時期に執筆されていた小説「箱男」(一九七三年)や、戯曲「緑色のストッキング」(一九七四年)の予告・宣伝も兼ねていた。さらに、全四四編のうちの一六編が「夢のスナップショット」と銘打って随筆集

『笑う月』(一九七五年)にまとめられたほか、掲載された掌編の多くが、のちに小説や隨筆の一部に組み込まれることになる。

こういつた「周辺飛行」での取組みについて、安部は「論理では辿り得ないその迷路をぐぐり抜けるための、ほく自身の体験的報告(方法論)なのである」(連載最終回)と述べる。すなわち、ひとつの筋道に沿って進む「論理」ではなく、試行錯誤を繰り返す「迷路」にこそ自身の「方法論」があるとしているのだ。だが、これまでの研究の多くは、「周辺飛行」を特定の作品を読むための手がかりとして参照するだけで、「周辺飛行」の「方法論」そのものを問う試みはなされてこなかった。そこで本発表では、「周辺飛行」を自律した作品として対象化し、①安部が四年間にわたつてどのような思考実験を試みたのかを定点点観測すること、②「論理」の構築ではなく「迷路」を作り出していく行為そのものを創作の営みと考えたその「方法論」に迫ること、③複数の表現形式が混在する「創作ノート」という形式でこそ可能となる主体の不確実性を問題化すること、以上の三点を柱として考察を行う。

環境批評とポスト三・一一文学・ 奥泉光『東京自叙伝』を例に

芳賀浩一

環境批評は、一九八〇年代にアメリカで始まり、その後のチェルノブイリ原発事故や地球温暖化による環境意識の高まりを受け、欧州や日本、韓国、台湾、中国、オーストラリア、トルコ、インドへと世界中に広がりをみせている。環境批評は一般に人間と自然の関係を新しい視点で捉える「環境文学」を分析するものとされてきたが、近年はポスト構造主義などの成果を取り入れ、あらゆる芸術作品の分析に立ち向かう、より普遍性のある批評理論となりつつある。

本発表は、東日本大震災後に生み出された小説作品に環境批評からアプローチをするプロジェクトの内容の一端である。ここで取り上げる奥泉光の『東京自叙伝』は東北太平洋沖地震によって「私」となった原発作業員の語り手による自叙伝であり、同時に「地震と火」を見続けた東京という場所の意識の物語

である。太古から現代までの天変地異を視野に収めたスケールは、「環境」の時代にふさわしいものであるといえよう。

この小説で注目すべきは、東京という場所の主体性の表出としての「私」の輪廻転生を描き、且つ鼠など言葉を持たない生き物を「私」の「基本形」とすることで、人間の主体性を自然災害の副産物であるかのように描いたことである。そして短期間のうちに地球規模で環境を破壊するようになった人間の在り方を「私」の行動原理として歴史的に物語ることによって、無名の個人個人の行動がやがて自らを地球から退場させてしまう結末を暗示する。

しかし一方で、環境批評における「ポスト人間」の問題意識と奥泉の小説の間には、ある認識的な距離があることも確かである。日本のポスト三・一一文学は地球環境の問題を視野に入れつつ個や場所を描くという困難な課題に直面している。東日本大震災は日本の文学がグローバルな人文学の再編の中にあつてどのような意味を持つのかを示す試金石となつているのである。

パネル発表

男性作家と女性読者をめぐる力学

——一九五〇年代から六〇年代の女性誌を中心に

武内 佳代・井原 あや

徳永 夏子

(デイスカッサント) 久米 依子

本パネルは、一九五〇年代から六〇年代にかけての男性作家と女性読者の関係が生み出す力学や多面性を、女性誌を中心とするメディア研究とジェンダー／セクシユアリティ批評の観点から掘り起こそうとするものである。

これまでの女性誌に関する文学研究においては主に、女性読者同士が投書欄などの誌面を通してどのような関係を築きあげていったのか、あるいは、女性の書き手たちが誌面などのような欲望を綴ったのかといったことが明らかにされ、多くの研究成果が蓄積されてきた。言い換えれば、女性誌のなかで女性た

ちが作り出した複雑な関係性を読み解いていくことに重点が置かれていたと言っている。

その一方で、女性誌に参入する男性作家が女性読者とのような関係を切り結んだのかという点については、例えば、男性作家の中間小説と女性読者との関係に踏み込んだ論考(菅聡子「よろめき」と女性読者——丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖の中間小説をめぐって」『文学』〇八・三)や、少女雑誌や女性雑誌に小説を連載し、読者投稿の選者も担当していた川端康成に関する論考(小平麻衣子「教養の再編と『新女苑』——川端康成の投稿指導にふれて」『日本近代文学』一四・五)をはじめ、近年研究が進展している。こうした研究状況をふまえ、本パネルでは女性誌を中心としたメディア研究を行い、戦後における男性作家と女性読者の関係性を検討していく。これまでの研究では、特定の作家や作品に焦点を絞ったものが多かったが、ここでは作家や雑誌を横断的に分析し、一九五〇年代から六〇年代の女性誌において、読者がどのような規範に縛られ、どんな場に置かれていたかを考察する。

本パネルが、とくに一九五〇年代から六〇

年代を対象とするのは、女性誌が、売れる雑誌メディアの主流を占め、かつ、折からの週刊誌ブームを受けて小説重視の月刊誌からグラビアや実用記事を中心とした週刊誌へと大きく変容する時期にあたるからである。

日本の敗戦後の復興期において様々な大衆向けの雑誌が雪崩を打って出版されたが、その中で一九四六年以降、女性誌にも復刊・創刊ラッシュが起こった。毎日新聞社「読書世論調査三〇年(七七)によれば、四八年には、第一位の総合誌『リーダーズ・ダイジェスト』以外は雑誌売上げの上位五位以内を女性誌が占めるようになり、のちに『主婦之友』が首位にたつ一九五〇年から六〇年代にかけては、女性誌こそが売れる雑誌メディアの主流となる。そのような五〇年代から六〇年代、いわゆる男性の大衆作家による小説連載が女性誌を賑わせ、女性読者たちの人気を獲得してベストセラーを生み出す。また、このメディア状況下、大衆文学・中間小説系の作家のみならず、三島由紀夫や大岡昇平といったいわゆる「純文学」系の男性作家たちも、女性誌に積極的に小説連載を持っていた。このように戦後の一時期、女性誌は現在では考えられ

ない状況にあった。管見の限り、六〇年ごろまでに女性誌の主流が月刊誌から週刊誌へと移行すると、七〇年代初頭にはゴシップ記事やグラビアの中心化とともに、それまで読者獲得の鍵ともされてきた連載小説の役割は徐々に女性誌から後退していくことになる。つまり戦後日本においては、五〇年代から六〇年代にかけてこそが、女性誌を通した男性作家と女性読者の関係の黄金期と言っても過言ではない。

本パネルは、このような女性誌の地殻変動が起こる特異な時代を対象に、各女性誌の特色をとらえつつ、女性のジェンダー規範（社会規範）やセクシュアリティ規範、女性のライフコースをめぐって、男性作家による言説が、女性読者に向けてどのようなメッセージを放っていたか、あるいは、放ちうる可能性を潜在させていたかを考えてみたい。

徳永夏子は、『新女苑』や『若い女性』『婦人画報』『婦人公論』などの女性月刊誌について報告する。月刊誌に掲載された男性作家の小説作品や、読者投稿の選評などを取りあげ、戦後の女性月刊誌における男性作家と女性読者の関係性と、女性に要請されたジェン

ダー規範について考察する。

井原あやは、『婦人生活』『女性明星』、また『女性自身』『女性セブン』などに掲載された源氏鶏太によるBGを主人公とした小説を取上げ、高度経済成長期に雇用の場と呼び込まれたBGがどのように表象されたかを考察する。その上で、誌面に描き出される女性規範やライフコース、および女性読者の位置づけを明らかにしながら、女性誌の主流が月刊誌から週刊誌へと移行する様相の側面を解明する。

武内佳代は、大岡昇平の女性誌での連載小説やその他の言説を取りあげる。大岡の小説テクストが女性を描くことを通じて、どのようなジェンダー／セクシュアリティ規範を女性読者に向けて打ち出していたか、その様相を掲載誌の特徴や時代背景からとらえ、従来ほとんど顧みられることのなかった大岡文学の側面に光を当てる。

以上のパネル報告を踏まえ、久米依子をディスカッサントに迎え、会場を交えた討議を行う。

戦後の男性作家と女性読者の関係の力学や多面性ばかりでなく、それらに関する研究の

方法論や課題を浮上させる意見交換の場としたい。

第三会場 (A402教室)

個人発表

「白痴」との距離

— 徳富蘆花「除夜物語」論 —

平石 岳

明治三三年は、蘆花にとって飛躍の年であった。『不如帰』（二月）『自然と人生』（八月）の商業的成功と、「おもひ出の記」（『国民新聞』三月、翌年三月）の好評は、名実ともに蘆花を『国民新聞』・民友社の看板作家に押し上げた。しかし、明治三四年元日の『国民新聞』新年附録に掲載された「除夜物語」（後『青蘆集』収録）は、「おもひ出の記」の評判の陰に隠れ、研究史においてほとんど注目されてこなかった。だが「除夜物語」には、「弱き」に目を向ける蘆花の作家性に収斂させられない問題が諷示されている。

本発表ではまず、「白痴」に対して行われた法整備を確認する。明治三三年は、精神病

者監護法、第三次小学校令に代表されるように、「白痴」が外出することに対して、暗に明に制限が行われた年だった。作中にも、この法整備を批判するかのような語りが行われている。次に、作中の鉄道事故危機が、明治三二年一〇月七日に起こった、箒川鉄橋汽車転落事故を想起させるように語られていることを指摘する。この箒川事故は、新聞各紙で大々的に報道されており、天災か人災かという議論が法廷にまで持ち込まれている。

この二つの社会的問題が作品の背景となっていることを確認した上で、「白痴」がいかにして〈物語〉となり、語られるのかに注目する。作中では、「叔父」が信州に旅行した際に、川中島で為吉という少年の「石碑」を見つけ、経緯を「村」の「老爺」に尋ねる。その内容を、東京で甥や姪たちに語る、という〈物語〉の流通が示されている。そして、「叔父」の語りには「上帝」「愛」「神」というキリスト教的文句が何度も用いられ、「白痴」が現世的な解釈では語られなくなっていく。

蘆花の特異なプロテスタント信仰、作中舞台と「蘆花生」の信州取材旅行も参照しながら、

ら、キリスト教と深い関わりを持つ民友社のなかで、蘆花が「白痴」をいかにして語ったのか、その方法を看取してみたい。

内面化する「著作」

— 『三四郎』における学生たちの言論

阿部 和正

『三四郎』（一九〇八年）の主人公の三四郎は上京する汽車のなかで、「著作をやる」という自身の将来像を夢想する。この将来像は、上京後に作り上げられた三つの世界のなかの、第二の世界に属するものだといえる。その世界の住人で、東京帝国大学卒業後、教師という職に就く広田や野々宮は、三四郎が憧れる著作活動を行う人物たちである。また、同級生である与次郎は、大学生でありながら、すでに著作活動を行っている。そんな与次郎の代表作が、雑誌「文芸時評」に掲載された「非常に尤もらしい口吻と、燦爛たる警句」に彩られた「偉大なる暗闇」という評論であるが、これは広田を東京帝国大学の教授にす

るために書かれた一種の人物論だった。『三四郎』における青年たちの活動は、東京帝国大学文科に自分たちが望む日本人教師を招聘することを目的としたものであり、「偉大なる暗闇」の執筆も、そうした青年たちの活動の一環として位置付けられよう。

本発表では、主に東京帝国大学やその教師について書かれたものを補助線にして、文脈の引き合わせなどから、『三四郎』を捉え直すことを試みる。そこから見てくるのは、三四郎の想像を超えて活動する青年たちの姿であり、彼らの運動が屈折していく過程である。そうした屈折は、彼らの「著作」の有り様も変化させ、主に自身の内面を語り、それを仲間内で消費するような体制を作り上げていく。三四郎は、活動する青年たちの決起集会でもあった「同級生の懇親会」に参加し、世間では「偉大なる暗闇」の著者と認識されているながら、招聘運動の積極的な担い手とはなれなかった。そのため三四郎の抱える屈折は、活動する青年たちとは異なっている。これまで失恋という観点を中心に論じられてきた三四郎の屈折が、上京前の夢であった「著作をやる」こと自体を問うものだったこと、

それが青年たちの共同体から離れていくことを暗示するものであった点も明らかにしたい。

パロディの製造（工場）

——森鷗外「里芋の芽と不動の目」論——

坂崎 恭平

森鷗外「里芋の芽と不動の目」（『スバル』明治四三年二月）は、化学製造所の所長を務める理学博士・増田翼を主人公とし、その製造所の「創立第二十五年」を記念する宴会の場で、彼が自身の半生を振り返りつつ、その経営哲学を滔々と語る、という筋を持つ短篇小説である。そうした設定をもつゆえか本作は、当時成立に向けて各界で論議が進められていた工場法（明治四四年公布、大正五年施行）について、鷗外もまた、内務省の中央衛生会という組織の一員として同法案にコミットしていた、という伝記的事実（日記の記述による）と、やや漠然とした形で結びつけられてきた。また一方で、作中で主に語られるのは、「職工」の「賃銀」の問題であり、そ

れは工場法案が主に議論の対象とした職工の雇用条件——衛生問題や労働時間、深夜就業や年齢など——とは、自ずからその内容を異にしている、という旨の断絶性も指摘されてきた。以上のように本作と工場法との関係については、その接続／切断性が取り沙汰されてきたわけだが、しかしそうした問題を問うために必要なはずの、工場法といった具体的な文脈そのものについての調査・考察は、意外にもあまりなされていないように思われる。そうした不足点を補うために、本発表では、鷗外が参加していた内務省中央衛生会を中心に、同時代の工場法に関する言説について概観する。しかる後、本作と工場法をめぐる言説との接点を探り、そうした文脈において立ち上がる、作品の修辭がもつ批評性／暴力性について論じたい。また、論の補助線として、増田のモデルであると言われている（森潤三郎『鷗外森林太郎』）、陸軍衛生材料廠の長であった薬剤監・羽田益吉、及び、増田が自身の人生哲学を亡き「兄き」との対比において語る際に名が挙げられる、田口卯吉——鷗外が卯吉を評した「鼎軒先生」（『東京経済雑誌』明治四四年四月）を視野に入れたつ

——についても、触れたいと考えている。

夏目漱石と禅の伝統

——『行人』を中心に——

藤 本 晃 嗣

遺作『明暗』のタイトルを書簡で「禅語」であると語ったように、晩年の夏目漱石の思想において禅が重要な意味を持っていたことはしばしば指摘されている。それは、禅を「近代の知性を根柢から救恤し得る様なより包括的な「論理(暗||明)」(加藤二郎『漱石と禅』)とする考えに典型的に見られるように、近代の問題との関わりから捉えられてきた。

本発表では漱石の禅の理解・認識がどのような禅の考え、より具体的には禅籍のいかなる文脈に基づくものであるのかを検討するとともに、漱石の禅認識の内実を明らかにするとともに、その意義をより広く同時代の思想状況の中で捉え直すことを試みる。漱石の作品内には禅に関する記述が散見されるが、それらの記述の持つ意義を明らかにする上で、禅籍の言葉との関係を検証するという作業が不

可欠である。本発表ではまず『禅門法語集』正・続(明治四十年三月・六月、光融館)の記述から漱石の禅の認識を再検討する。『禅門法語集』は、鎌倉時代から江戸時代までの日本の代表的な禅僧の仮名法語を集めたものであり、漱石も熱心に読んでいたとされる。漱石の禅の認識が日本の禅の伝統と深い結びつきがあることを具体的に文脈から明らかにする。

その上で、今回は、「禅的世界」や「禅的理想」を表現したものとされる、『行人』における一郎の「絶対即相對」という言葉の内実を考察する。「神は自己だ」「僕は絶対だ」という一郎の言葉から、一郎は自らの「自我」を絶対化する「自我中心主義者」として語られてきた。しかしこのような捉え方は、明治末から大正初めにかけて日本の思想界で流行した、例えば「新理想主義」のような考えと、一郎を同質のものとして見ていると言える。本発表ではこのような考えと漱石との距離を、一郎の「絶対即相對」といった禅の認識に見ることで、近代の問題の中で見出される禅の意義を検討する。

個人発表

漱石の文学における移動空間と新橋駅

—— 啄木文学に表現された新橋・上野駅を視座に ——

崔 雪 梅

漱石の文学において、初期の漢詩作品から小説に至るまで、汽車、路面電車、蒸気船等の交通機関をめぐる表現は、登場人物の人物像・物語の時代相・語り手の世界観を物語る装置として文脈に仕込まれている。例えば、小説『草枕』の最後のところに、漱石は画工を通して、文明を代表する「汽車」が個人に自由を与える一方、「あらゆる限りの手段」を尽くして「貨物同様」に個人の個性を踏みつけようとし、現代文明の「あぶない標本の人草」『三四郎』『それから』『門』等の小説

においては、登場人物の入京・離京を新橋駅に設定し、物語の展開にかかわる主人公らの移動空間を一八八九年七月一日全通になった「新橋・神戸間」の東海道線沿線の地域に設定している。

明治期の工業化の進展と鉄道網の展開に伴い、人口の移動が一層活発になり、汽車で上京する人にとつての東京の入口は新橋駅と上野駅に大別される。漱石が描いた人物らは、まさに横浜・名古屋・京都・大阪等の大都市を貫通する東海道本線を利用し、「東京の玄関口」と呼ばれる新橋より入京する群衆に属している。一方、啄木の文学における物語の展開は東北本線の発着駅である上野駅と緊密に結びついている。彼の「ふるさとの訛なつかし」という短歌は、すなわち、上野駅に集まる東北人の姿を描いた作品である。また、未完で終わった小説『故郷に入る』において、啄木は新橋駅に対して上野駅を「東京の裏門」と称し、この「裏門」をくぐることしかできない東北人は「永久に幸運」を授からないと述べている。

汽車・駅に対する注目は同時期の他の作品にも見られるが、漱石の新橋駅に対して屈折

したイメージとして捉え、さらに、両駅を対比的に表現しえたのは啄木のみである。本発表は、汽車にかかわる移動空間と新橋・上野駅を視点として、当時の時代状況を考察しながら両文学者の文学観と社会観における相違を分析したい。

〈新感覚派〉としての富ノ澤麟太郎
—— 「あめんちあ」「狂人」を中心に ——

黒 田 大 河

富ノ澤麟太郎(一八九九—一九二五)を新感覚派として位置づけることに異論があるだろう。富ノ澤は『文藝時代』同人ではなかったのだから。

早稲田予科時代に横光利一、中山義秀、小島助らと同人誌に初期作品を発表、中井繁一の紹介で佐藤春夫に師事するも、文壇的には僅かに「流星」(『改造』一九二四・一〇)一作を遺して、翌年和歌山県新宮の佐藤春夫の下で客死する。横光の誤解から佐藤春夫が富

ノ澤を虐待したという文壇ゴシップを生んだ。『文藝時代』は一九二五年五月号に遺稿「狂人」と共に中井繁一、古賀龍視、諏訪三郎、横光らの追悼文を掲載し追悼特集を組む。同月の『改造』にも遺稿「あめんちあ」が発表される。『文藝春秋』人脈と佐藤春夫との間に引き裂かれた不幸なマイナーポエツトという見方もできよう。

しかし、同年一月川端康成が「新進作家の新傾向解説」の中で片岡鉄兵、十一谷義三郎、横光利一、金子洋文に並べて名前を挙げていたように、またそれをうけてか三月号では赤木健介が「新象徴主義の基調に就いて」において『文藝時代』同人と同列に「日本の新象徴派」と評していたように、富ノ澤の作風は『文藝時代』同人に高く評価されていた。やがて横光が『富ノ澤麟太郎集』（一九三六・一一、沙羅書房）をまとめ、天逆した心美しき詩人として伝説化される以前の、いわば新感覚派の未発の可能性として、富ノ澤のテクストは読み直されなければならない。

本発表ではポー由来の象徴主義的作風、ドイツ表現派の影響からのドッペルゲンガーのモチーフの指摘、伝記的事実からの父不在・

母親嫌悪といった研究的評価を踏まえながら、『文藝時代』の同人諸作との同質性と距離とを分析する。特に後年の作品「秋立ちて」まで富ノ澤にこだわりの続きを横光の、テクストに於ける富ノ澤の痕跡を、新感覚派を立ち上げる戦略として読み替えてみたい。

富ノ澤という水脈を根底に置いて見ることで、新感覚派の系譜学的検討へとつながる再評価が可能になるだろう。

再出發後のプロレタリア短歌運動

小長井 涼

プロレタリア歌人同盟は（詩への解消論）などを契機として一九三二年一月付で解散するが、同年中には「短歌クラブ」が、また三三年には「短歌評論」が創刊され、プロレタリア短歌運動は再出發を開始した。このとき運動の課題として挙げられたのは左翼的公式主義の清算と大衆性の確保である。かつての運動が大衆から乖離してしまつたことからこれらが課題とされたわけだ。しかし再出發

後のプロレタリア歌人たちは、大衆を運動のなかに取り込もうとする一方で、大衆の作る短歌の芸術性の低さのために、大衆を、とくに農民の詠む短歌を非難する。本発表では、再出發後のプロレタリア短歌運動と大衆との関わりについて報告したい。また、プロレタリア歌人たちがみずからの短歌のアイデンティティをどのように確保しようとしていたのか、その点にも注目する。プロレタリア歌人らが「既成歌壇」と呼んでいた、たとえば「アララギ」を中心とする歌人らの詠風とプロレタリア短歌とはどう異なるのか。この相違をプロレタリア歌人たちが主張しようとしたときに彼らが着目したのが、当時の文壇で論議されていた行動主義文学であり社会主義的リアリズムであった。しかしこれらの論議をプロレタリア短歌に導入したとき、奇妙なことが起る。プロレタリア短歌は元来、唯物論的な社会分析・社会告発をその基底に据えていたにもかかわらず、次第にその先鋭な唯物論的批判性からは背離してゆき、短歌における抒情の重要性を説きはじめるのである。プロレタリア歌人たちの歌論におけるこのような変遷の過程をたどりつつ、短歌とい

う短詩型文学自体が抱えている問題性——たとえば叙事と抒情の対立、あるいは作品の普遍性と個別性の対立——についても考究を及ぼしていきたい。なぜなら短歌という文学形態の特殊性と大衆性の問題とは密接に関係していると思うからである。

昭和十一年十二月の〈女景〉

——川端康成「夕映少女」の射程——

内 田 裕 太

「イタリアの歌」、「むすめごころ」、「浅草

の姉妹」、そして「夕映え少女」を併せた四作品が東京藝術大学大学院映像研究科に在籍する四人の新鋭監督たち（「夕映え少女」は船曳真珠監督、田口トモロヲ主演）によるオムニバス映画、『夕映え少女』として二〇〇八年一月に公開された。その中であって「夕映え少女」は、〈川端康成の描く女景〉と銘打たれ、〈今の世にも変わらぬ若いおんなごころの不思議〉を描くというその映画コンセプトの掉尾を飾る作品であったと言える。も

ちろん原作からはだいぶ変化が加えられてはいるものの、少女の心象の揺らぎが主要なモチーフの一つであることが映像からもうかがえるとともに、現代における本作の受容の一端が垣間見られるのは興味深い。

他方、小説における「夕映少女」(『333』昭一・一二)について、三島由紀夫は「私の考へでは、「禽獣」の主題の明確な発展のやうに思はれる」(「解説」、川端康成『夜のさいごろ』浪漫新書、昭二四・一)と述べ、初期の代表作「禽獣」(『改造』昭八・七)からの展開と位置づけていることは示唆的であり、川端文学における本作の位相を問う発言とも言えよう。

本発表では、こうした観点を視界に収めつつ「夕映少女」の検討を行う。また川端文学における〈少女〉についてはこれまで多くの言及がなされてきたが、本発表においてもその表象に注目しつつ、作品の魅力に迫りたいと考えている。